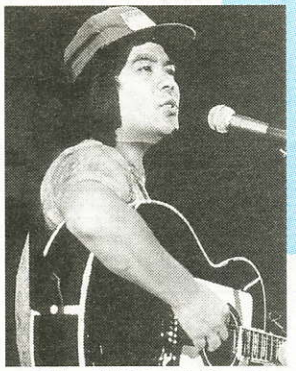
「ああ宮城県」で人気歌手になった吉川団十郎さんが「営業エリアは宮城県だけの100%ローカルタレントだから、他県じゃ知名度はないに等しい。こりゃ死活問題。ゆるぐねえでがんす」

74年、ヤマハのポプコンで入賞した 吉川団十郎さん 63歳

70年代、新人フォーク歌手の登竜門だったのがポプコンこと「ヤマハポピュラーソングコンテスト」だ。きょう登場の吉川団十郎さんは74年の大会で入賞、76年に発売したデビュー曲「ああ宮城県」のヒットで人気歌手の仲間入りをした。芸能界引退後は宮城県南部の村田町で陶芸家、水墨画家として活躍する一方、音楽活動も続けている。吉川さん、大震災後はどうしているのか。

あの人は今こうしている

「名取川の河口から川上に向かって押し寄せる津波の第1波を空撮したNHKニュースのライブ映像がユーチューブにアップされてるのっしゃ。家々がのみ込まれ、漁船や車、トラックなどあらゆるものが流され、田畑がガレキや廃材で埋まっていく……。オラ、それ見てタマげたね。だって、その名取市閖上（ゆりあげ）地区こそ、生まれ育った土地だもの。幼なじみやアマチュアバンド時代の仲間、友達が大勢住んでて、〝ここ○○君の家だ〟〝今度は△□さんの家が危ない〟って空撮でも分かるっちゃ。あの津波の濁流に友達が巻き込まれたと思うと胸がギュッと締め付けられ、今でもつらいのっしゃ」



♪男　菅原文太なら　あ～　歌手なら吉川団十郎

東北自動車道村田ICから車で約8分。蔵の町で知られる村田町の丘陵地に立つ自宅で会った団十郎さん、こう言ってため息をついた。

「震災の前の日はオラの63回目の誕生日でね。残りの人生考えると、ひと旗揚げるラストチャンスだっちゃ。で、震災当日は親友2人と広告関係の新ビジネス立ち上げと、去年発売した青森県のご当地ソング『下北半島』のキャンペーン企画をウチのリビングで練ってたの。そしたらこれでしょ。ぜ～んぶパアよ」

村田町は震度6強。幸いにも自宅に損傷はなく、在宅中だった夫人をはじめ、仙台市内で携帯電話会社のシステムエンジニアをしている長男、岩沼市のスポーツジム勤務の三男も無事。次男は沖縄在住だ。

「あの津波の濁流に友達が巻き込まれたと思うと胸がギュッと締め付けられ、今でもつらいのっしゃ」

「別棟の陶芸作業場に行ったら、見事なほど値段が高いものばっかり壊れててガ～ックリ。それでしばらくして思ったワケ。オラの収入源は陶芸、水墨画、歌手のライブ、それと月2、3回の講演会だっちゃ。つまり、どれも大きな災害が起きたら後回しになるもんばかり。しかも営業エリアは宮城県だけの100%ローカルタレントだから、他県じゃ知名度はないに等しい。ということは、宮城県が復興しないことには、収入ゼロが続くってこと。1年？　いんや、最低3年は覚悟せんとな。家のローンもあと10年ほど残ってるし、こりゃ死活問題。ゆるぐねえでがんす」

2年前にDVD「日本全国作曲の旅」、去年は、「人生ラストスパート」とミニアルバム「初老の雄叫び」を自主制作。音楽活動にも力を入れていた。

「これからのテーマは記録に残るより、記憶に残る歌と、いつまでも歌い継がれる歌のふたつ。だから、被災地の悲惨な様子を記録にとどめつつ未来に希望を託す新曲『復興祈念曲』と『ああ宮城県　復興バージョン』を作り、『人生ラストスパート』に追加収録して5月下旬から発売する予定だっちゃ。あと、5月27日に大森のフォーク酒場『風に吹かれて』で東京では34年ぶりになるライブをやり、29日には栃木県塩谷町にある塩谷中学校アリーナの復興チャリティーライブで歌うっちゃ。ぜひぜひ来てけさいん」